山梨新報「直言」原稿

平成十六年四月十六日

「四枚カード問題と県議会」

山梨大学　理事・副学長　伊藤　洋

人は、長いこと一つの環境下に置かれていると、その環境に適応した思考に秀でてくるものの、それが変ったときには深刻な不適応を来たす。ここに面白い実験があるので紹介しよう。

「ウェーソンの四枚カード問題」という一種の論理ゲームがある。４枚のカードを見せておいて、与えられた命題に対して論理的に正しいものをそして論理的に正しくないものと、正しくないものを探し出すというものである。もちろん、なぞなぞやとんち知などではなく、論理的に厳密な回答が要求されるオーソドックスなゲームである。

たとえば、今ここに数字と英文字の組み合わせを裏表に印刷したカード４枚が「二」、「五」、「Ａ」、「Ｐ」と書かれた面を見せて置かれている。これらでは英文字の母音が書かれている場合には、他方の面には必ず偶数字が書かれているという。この命題が正しく適用されているか否かを検証する必要のあるカードはどれでしょう、という問題があったとする。

まず「二」は偶数だが、命題からして、その片面には母音が書いてあってもよいし、子音が書いてあっても構わないので、調べる必要はない。ところが「五」は、その片面にもし母音が書いてあるとルール違反だ。だから、これはひっくり返して検査してみる必要がある。同様に「Ａ」は、母音だから裏面には必ず偶数字が書かれていなくてはならないが、違反して奇数字が書いてあるかもしれない。最後に、「Ｐ」は子音だから、裏面に何が書いてあっても構わない。つまり正解は、「五」と「Ａ」である。

さて、話はこれからだ。こういう論理ゲームを２０歳代から６０歳代の老若男女を被験者にして行う。命題が経験的なものである場合には、年齢差

はほとんど無いのだが、経験則に則らない抽象的な命題でテストするとはっきりと年齢差が生ずる。すなわち、統計的に６０歳代の平均得点は、最も成績のよい３０歳代の半分に過ぎないのである。すなわち、未経験な新しい問題に対しては、加齢は間違いなく不適応を起こすと言わざるを得ない。残念ながらこれが最新の行動心理学の教えるところなのである。

現代のように、世の中の何もかもが激しく変化していく時代にあっては、悲しいことにベテランの知恵はあまり当てにならないということだ。もちろん個人差はあって、常に前向きに学習を継続している第一線の人々には、この結論は当てはまらない。

ところで、春一番よろしく今年もまた二月定例県議会は議長問題でもめたようだ。それこもめたこれそ、ドッグイヤーと言われる激動の時代、山梨県には難問山積だ。押し寄せてくる県政課題に対して山梨県議会が夜を徹して議論をし、指導性を発揮して、快刀乱麻、提案したなどという美談を、筆者は寡聞にして聞かない。

議会制度というものは、間接民主主義を基本とする。それゆえ、そこでは県民の利害得失、意見分布を公正に反映し、人々が最も欲する課題に、ついて熱心に議論すべきものである。誰が県議会議長に就任するかなどという問題は、ベテラン議員の経験則では重要であっても、多くの有権者の興味関心事ではない。

議会が間接民主制度になっているのは、われら社会的システムが、古代のギリシャのように多数の奴隷以外は少数の特権的市民による都市国家などではなく、直接民主主義が不可能な程に多数の人口を擁する大衆的市民社会であって、それゆえ、それにこれが便法として行われているのである。今や、情報ネットワークが完備して市民は世界の先進情報から学び、情報化社会の基盤である個人情報保護制度も完備し、電子政府が現実のものとして稼動を開始しようという時代である。こうなると、直接民主主義を実行しようと思えば、それも不可能ではないのである。

選良の紳士淑女諸氏は、眼前に高度情報化社会という大敵が、その爪を研いでいるというこの事を認識しなくてはいけないのである。その敵が見えないばかりか、議長問題などという権力闘争にうつつをぬかしている。県民から、「直接民主主義導入」を言われる前に、議会機能を高める努力をしておくことだ。